

空くうの魔法陣

上

斎藤
栄

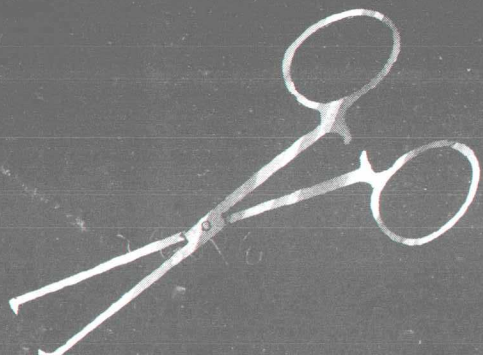


空



宋
魔法陣

上



空の魔法陣 上

一九八二年九月二五日 第一刷発行
一九八二年一〇月二五日 第二刷発行

定価 九八〇円

著者 斎藤 栄

装丁者 沢田 弘

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

郵便番号 一〇〇一

電話 出版部 (〇三三) 二三八二二八四二

販売部 (〇三三) 二三八二二七八一

印刷所 共同印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

空の魔法陣 上 目次

第一章	腐肉と野犬	5
第二章	車椅子の女	31
第三章	国東半島へ	57
第四章	ハーレム街	83
第五章	土中の子宮	112
第六章	拳銃の試射	143
第七章	第一の殺人	168
第八章	拝金主義者	194

第十三章	第二章の殺人	325
第十二章	阿相の軌跡	301
第十一章	南川の過去	273
第十章	殺意の人々	242
第九章	記者と刑事	225

空の魔法陣
上

色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。是故空中。無色。（摩訶般若波羅蜜多心經より）

第一章 腐肉と野犬

1

夏の夜の明けるのは早い。薄明の中を、冷えた空気が静かに流れていた。

滝源太は、特別詔えのライトバンをゆつくりとおり立った。横浜市の南はずれにある、新興住宅地の裏手、市街化調整区域内の丘陵地である。

十五年も、この道で仕事をしてきた源太には、動物的なカンで、こうした所に、彼の狙っている獲物がいるのを知っていた。住宅地に近ければ、食べ物は豊富だ。それでいて、山林などの緑が、彼等の時を^{ねま}提供してくれる。

彼等というのは、野犬・野良猫のことである。

源太が勤める有限会社・平和プログレスは、社名を聞いただけでは、なんの商売をしているか、誰にも想像できないだろう。これは、源太が七人の仲間と、十五年前から始めた野犬・野良猫などの捕獲販売会社なのだった。

そうした動物を捕獲して、一体どんなところへ売り渡すのか、ちよつと見当がつかないかもしれない。たとえば、野良猫なら、三味線の皮になることは想像できる。しかし、

野犬の皮もそうなるのか。

実のところ、源太は自分達の獲物が、最後にどんな運命を辿るのか、追求したことはない。彼はただ、新鮮なカタチで捕えてきたものを、新大同産業という会社へ売っただけである。この会社が、いわば平和プログレスの親会社に当たる。

そこで、獲物は、皮と肉に分けられる。ここまでは、源太も知っている。血のべつとりついた野犬や野良猫の毛皮が、満艦飾のように干し場を埋めているのを見たことがある。また、毒々しい赤色の肉が、ドライアイスのパッケージに詰められて、いずこかへ運ばれるのを目撃していた。

新大同産業の公式の説明では、「肉は動物園などに、猛獣の餌として売り、皮は三味線その他の鞆皮になる」ということだった。

けれども、源太の耳にはいつてくる噂は、それとは違った不気味なものが多かった。

肉の運搬を担当している運転手達が、源太に洩らしたのは、「確かに、時たま、動物園に運ぶことはあるがね。大部分はドンマイ食品の工場だよ。ホラ。ハンバーグで有名な……」という話だった。

つまり、運転手の話だと、そうした肉は、オーストラリアのカンガルーの肉や輸入した野ねずみの肉にまぜて、ハンバーグとなっているというのだ。

源太は、コトの真偽を知らない。また、知る必要もない

と思つてゐる。實際、酒に酔つたとき、ある人にこの話をしたら、即座に、「そんな莫迦なこと、あるわけがない」と一笑に付された。

「誰も信じてくれない話なんだから……」

と、源太は内心、どこかホツとした。

とにかく、ここ数年、野犬・野良猫の需要は多い。それだけ、どこかで必要とされているのだ。

へおれにとつては、値段が上つて、儲けがふえればそれでいいんだ」

と思つた。

皮についても、三味線に使われるのは、ほんの一部で、大部分は毛皮として売られるという噂もある。それも脱色・着色という過程を経て、南洋ミンクとかいう品名で、高級毛皮に化けるのだそうだ。ミンクというのは、本物でも、細いストリップに毛皮を割き、それを縫い合わせる。だから、野犬の中で、上等な奴を、巧みに加工すれば、かなりいい毛皮になるのかもしれない。

いづれにしても、源太にとつては、どうでもいいことだ。世間の女性が、馬鹿みたいに毛皮を買い求め、その結果として、彼の商売が繁昌するなら、別に真偽を詮索する必要もないことなのだ。

2

源太は、右手の小型麻醉銃を構えた。ひと昔前の野犬捕

獲員は、針金と棍棒に頼つていた。今の源太も、一・五メートルくらいのジュラルミン製の軽い棒を左に持つてはいる。が、これは護身に過ぎない。

野犬にしても、野良猫にしても、毛皮を傷めてはいけなし、殺すことも具合が悪いのだ。おそらく、新鮮な肉が欲しいからだろう。そうした購入側の要望を採り入れて、麻醉銃を使つているのである。

源太の腕時計は、午前四時になつていた。これから六時までの二時間が勝負であつた。野犬達は、眠りからさめ、餌を求めて、人家の近くへ現われる。そして、勤め人の姿がふえ始めると、森の奥へ姿を消すのだ。

源太は、登音を消すためにはいているゴム底の靴を、一歩一歩、静かに運んで、目的の場所に近づいた。

そこには、昨夕、源太が撒き餌しておいたのだ。これは、釣師のやる行為と同じである。

撒き餌は、ドンマイ食品から格安で分けてもらったハンバーガーだつた。もし、噂が正しければ、野犬達は共食いをしていることになるが、不思議とこの餌が野犬を魅きつけるのだ。

源太が車をとめたのは、ハイキングコースの一部になつている場所だが、そこから五十メートルも離れた窪地が、目的の土地だつた。

少し小高い岩肌、腕立伏せをする恰好をして、腹這いになつた。野犬は、嗅覚、聴覚ともに鋭いから、下手をす

ると、たちまち逃げられてしまう。

茂みの間から見おろすと、

「いた、いた……」

と、源太の胸が高鳴った。

この商売をなん年やっつけていても、獲物を発見した瞬間は興奮する。一万円札を見つけたような気がするのだ。

源太は麻酔銃の銃口を目標に向けた。野犬は二匹いた。一匹は黒っぽくて小さい。が、ガツガツとハンバーガーを食べている茶系統のは、かなりの大物だ。仕切り値は、やはり目方の重い方が高くなる。できるだけ、大物を手に入れたい、と思った。だから、源太の銃口が、茶色の犬の胴体にピタリと向けられたのは、当然のなりゆきだった。

「一発で……」

仕留めようと思うから、つい夢中になって、身をのり出した。これが失敗だった。枯葉が思いもかけぬ音をあげ、野犬の耳がピクツと動き、鋭い目がこちらを見た。

「いかに……」

逃げられると思ったので、引き金を引いた。弾丸は飛んだ。獲物に当たると、自動的にピストンが働いて、即効性の注射薬を体内に送り込む。

命中はしたが、野犬は苦しまぎれにはねまわり出した。小物だと、一発で昏睡するが、ちよつと大きくなると、そうはいかないのだ。

源太は、銀色に光る棒を手には、野犬に走り寄った。すで

に、黒い方の一匹は、危険を感じて逃げ去ってしまった。

「こいつ！」

源太は、思わず声をあげて叱咤すると、棒の一撃を野犬の頭に振りおろした。

甲高く叫んだ野犬は、次には、牙を剝いて唸った。そして、死力を尽して、源太に飛びかかって来た。

ここが腕の見せどころである。野犬の習性として、噛みつこうとするから、どうしても口を開く。牙を剝く。この瞬間、避けてはいけぬ。ジュラルミン製の棒を、咽喉の奥に突き立てるのだ。

すると、反射的に、野犬はガブリと棒に噛みつく。凄まじいほどの力だ。牙が光り、その両側から、ヌラヌラした唾液がしたり落ちる。

普通の人間には、ぞつとするような光景だ。が、源太には日常茶飯事だった。

「こいつのお陰でメシが食えるんだ」と思っている。

野犬の生命など、単なる商品に過ぎないわけだ。棒の端に噛みついて、ハアハア息をついている生き物が、憐れなこととは思ったこともない。

むしろ彼は、自分が野犬を退治して、世の中を良くしているんだと、たまに思うくらいだ。

棒の先に、噛みつかせたまま、源太は一呼吸、二呼吸と待った。慌てる必要はないのである。こうして、時間が経

つのを待つていれればいい。

そのうちに、麻酔薬が犬の神経を冒し、運動の自由を奪つてしまふ。どうしても暴れるようなら、二発目の弾丸を撃つただけだが、それは好まなかつた。

不意に、野犬はバクツと口を開いた。ジュラルミンの棒が口から離れると同時に、犬は腰がぬけたようにペタンと地面に坐り込んだ。そして、一回だけ、腕くような素振りを見せたのも束の間、ゴロンと横になり、深い眠りにはいつた。

「……………」

源太は、フンと鼻先で嘲笑し、用意してきたロープで四つ肢を縛つた。その上で、針金の箱口具を野犬の口にかけた。

これでひと仕事片付いたわけである。この一頭をライトバンに投げ込んだら、別の狙つた場所へ移動しなければならぬ。

あたりは大分、明かるくなつてきていた。

3

この朝の源太は、まったく、ついていなかつた。最初、かなりの大物を一頭捕獲したのを除けば、第二の撒き餌地点では、ハンパーガーが食べ散らかしてあるばかりで、野犬・野良猫とも、姿がなかつた。第三の地点では、灰色の程度度の獲物を見つけたものの、いち早く逃げられてしま

い、折角の麻酔銃も役に立たずじまいだった。

午前五時半を廻つた頃、市街地近くで、北島繁の車に会つた。北島も平和プログレスの仲間で、今朝、源太のすぐ隣りの地域に網をはつていたので。

若い北島は、五十歳の源太以上にしよげていた。

「繁さん。どうしたい？ 調子よくないのか？」

源太が訊いた。

「嫌になつたよ。もうこの辺ではいい稼ぎはできなくなつたね。埼玉か千葉へ、カシを爰えなくちゃ……………」

情なさそうな顔をして、運転台から源太の方を見た。

「こつちもだよ。一頭しか、かかつてくれなかつた。今朝はもうダメかもしんない……………」

「帰りたいし、泣きたいし……………」

「ひどく弱気になつたもんだな。ま、そう言わずに山の中を、もうひと廻りして来たら？ この辺までおりて来てしまえば、飼い犬しかいないぞ」

「離れでも構わないよ、こうなれば……………」

首輪をつけた飼い犬が、鎖から離れて迷い犬になつたのを、〈離れ〉という。問題が起きるのを恐れて、普通は手をつけぬ。

「へ、まをして、厄介なことにならないようにしてくれよ」

源太は窘めた。近頃では、死んだ動物の処理が、公害とのからみで、かなりうるさくなつてゐる。ひとつには、さまざまな動物がペットになり、そのペットが死ぬからであ

る。死んだ動物については、へい獣処理場等に関する法律というのがある。へい獣とは、死んだ獣畜のことだ。獣畜とは、牛、馬、豚、めん羊、山羊を指して、犬や猫は含まれていない。

しかし、野犬を集めて、これを処理して利益をあげているとなると、法律とは無関係に、世間の眼がうるさい。飼いい犬に手を出したと分かれば、どんな尻を持ちこまれるかしれなかつた。

「分かつてる、分かつてる」

北島は、半ばやけ気味だつた。

「じゃ、もう少し粘つてみるんだな」

源太はそう言つて、フロントガラスから前方を見て、息を詰めた。

「……………」

「え？ どうしたの？……………」

北島は、急に變つた源太の態度に、すつと視線を動かしたが、それも三十メートルほど離れた畠の中に釘づけになつた。茄子畑と黒土の見えている境のあたりを、一匹の野犬が斜めに突つ切ろうとしていた。色は黒と白の斑である。北島には、その脚の太さから、典型的な野良犬であることが分かつた。

「おい。獲物だ」

と源太は言い、車のエンジンを切つた。

「うむ」

それだけで、二人が次になすべき行為は決つたようなものだ。北島も車のエンジンを切り、犬をおどかさないうようにして、ドアをあけると、大地におり立つた。

源太の手にも、北島の手にも、麻酔銃を初め、ロープなどの七つ道具がしつかりと握られていた。今朝、最後のチャンスに違いないのだ。

「よく見る。何か餌をくわえている。用心しろ！」
と、源太が囁いた。

野犬は、口の先に、ブラブラと何か、塊かたまりをくわえていた。彼等の習性として、安全地帯で食べ、腹が満ち足りると、どこかへ埋めておくのだ。このときは、気も立つているし、神経過敏になつているのである。

「おれはこつちへ廻る」

北島は、右手へ迂回した。源太は左へ廻つた。左右から挟むように追うのだ。さいわい、風は、野犬のいる方角から吹いて来ていた。嗅覚で悟られることは少なそうだった。

4

犬はもともと肉食獣である。人との長い生活を経て、雑食性にかわつてきているが、野犬や野生犬となると、動物性のタンパク質をとても要求する。だからこそ、ハンバークーなどを、撒き餌に使うのである。

猫を中心に捕獲するときには、マタタビを与えるが、今朝のような犬を狙う場合は、肉だけで足りる。

今、目の前に現われた犬は、何かを口に銜^{くは}えていたが、それが昨夕のハンバーガーかどうかは分からない。しかし、もし、そうだとすると、充分に満腹した上、あまった分を、どこかへ埋めに行くところだろう。

源太は、内心、

「こいつをいたただかなけりゃ……。食い逃げはさせないぞ。」

と思った。

この商売のコツとして、「相手が犬なら猫になれ、猫なら犬になれ」というのがある。これは、犬に対しては、猫のように、登音を忍ばせて近づけ。猫に対しては、犬のように走って迫れ、という意味である。

源太は、ほとんど物音ひとつ立てずに、たちまち問題の野犬に十メートルまで近寄った。

「まだまだ……」
と思う。

麻醉銃は、猛獣用のと違って、小型だから五メートルくらいの至近距離で発射するのが一番効果的である。十メートルでも有効とされるが、下手をすると、毛皮にさえぎられて失敗する。

茂みの彼方に、ちらつと北島の姿が見えた。彼も相当近くまで追い迫って来ているらしい。

平和プログラムの給料は、基本給プラス能率給で、獲物は犬一頭につき千円、猫一匹につき五百円もらえる。基本

給の低いのはやむをえないが、獲物さえあれば、かなりな収入になる。麻醉銃の弾丸には、滝源太はT、北島はKという風に、イニシャルが記してある。だから仕留めたとき、誰がやったかの争いはない。二人の弾丸がはいってれば、折半になる。

源太は、じりじりと間合いを詰めた。うまい具合に、野犬は未だ追っ手に気がついていない様子だ。

彼は、少し急いで、野犬の前方に出る位置に進んだ。これも用心しないと、北島の流れ弾丸に当たる可能性がある。麻醉弾にやられても、生命に別状はないが、必ずひっくりかえって、しばらくは意識を失う。これまで、こうした事故がなん度か起きている。便利なようで、扱いの難かしい武器である。

「おや？」

源太は、野犬の口から垂れさがっている品物に気がついた。なんともいえず奇妙なものだ。少なくとも、ハンバーガーなどという品ではない。

このとき、野犬の歩みが急にとまった。臆病そうに、耳を立て、あたりを見廻した。これは危険を感じたシルシである。次のシーンは、野犬の暴走だ。彼は夢中で走り出すだろう。

「今だ！」

動きのとまったときが、絶好のチャンスなのだ。

源太は、這うようにしていた躰を起こすと同時に、狙い

を定めて、引き金をひいた。手応えがあつた。しかし、北島も遅れじとばかりに、麻酔弾を撃ち込んでいた。

左右の脇腹に、鋭い針の攻撃を受け、野犬は銜えていたものを口から離すと、一声甲高くなき、くるくると走り廻つた。そして、その場へ、酔つ払いみたいに、バタリと倒れこんだ。

「よし、成功だ」

「うまくいったな」

口々に言つて、源太と北島はその場に走り寄つた。

夏の朝は、すっかり明けていた。その陽光の中で、黒白の斑の野犬は、草の上に倒れていた。その腹部は荒々しく、ふくれたり縮んだり、動くのをやめなかつた。

「毛並のいい犬じゃないか。柴犬か何かの血が少しははいつていそうだ」

と、源太は言つた。

「二発同時にくつては、イチコロだな」

北島は、自分もうまく撃つたことを、先輩に誇示する言い方をした。

「折半にしても、これは大物のうちにはいる。ま、よかつた」

源太はなんとなくホツとした。しかし、北島が急に無言になつて、地上の一点を見詰めているのに気がついた。

「なんだい?……それは。その犬が銜えてきたやつは……」

北島は、石のように軀を固くしていた。そのそばに行き、品物の正体をひと目見て、源太は「へあつ」と思った。

半ば腐りかかつていたが、その肉の塊りには、明らかに爪がついていた。骨が露出した指が三本まで数えられた。それは人間の手であつた——

5

「これはまずいぞ」

と、源太は言つた。

「どうする?」

北島の顔も蒼かつた。

「どこかに、人間の死骸が埋めてあつたんだ。そこから、こいつが銜え出してきたに違いない」

源太は、忌々しげに、打ち倒れている獲物を見やつた。

「警察へ届けるのか?」

「莫迦言え。かわり合いになつたら、丸一日つぶれるだけじゃないぞ。まるで、おれ達が人殺しみたいな目で見られる。そいつはご免だ」

源太は警察が大嫌いだ。心のどこかで、自分が陽の当る場所で大声の出せる仕事をしてはいないと、思っているせいもある。

「じゃ……」

「このまま消えちまおう。さ、早く……」

源太は、なるだけ腐肉の方へ目をやらないようにして、

野犬の足をロープで結んだ。北島も、針金の輪を犬の口にかませた。

そして、二人が獲物を持ちあげようとしたとき、急に登音が近づいて、人影がぬつと覗いた。

源太はハツとしてそつちを見た。その人影は、六十くらいの白髪の老人と、黒い女だった。老人は肩にかける電動草刈機を所持していたから、近くの兼業農家の人間だろう。へしまった!

と、源太は内心で舌打ちした。

ここで見られたら、もう〈消えちまう〉ことはできない。この老人と女が、二台の車のナンバーを覚えていられるだろう。そして、人間の手がそこに落ちていたとしたら……。もう度胸をきめて、開き直るのだ。

「おう。いいところへ……。ちよつと訊きたいんだが、この近くに交番はあるかね?」

源太は声をかけた。

このときには、老人の目が、捕われた野犬とそのそばに落ちていた腐肉の上にあった。

「交番?……ああ、あるにはあるが……」

老人の声の囁れた調子は、いかに彼が驚いているかを示していた。

「いや、おれ達は野犬捕獲員だがね。こいつをつかまえたら、口に変なものを銜えていやがった……。どうも人間の手らしいんだ。どこかに死骸が埋まっているのかもしれないな

い。で……届けた方がいいと思つて……交番に」
「そりや大変だ。案内しましょう」

老人は、野犬捕獲員と聞いて、市の職員と錯覚したのか、俄かに表情をゆるめた。

源太と北島の二人は、獲物をライトバンの中へ投げ込んだ。それから北島一人を、手首の落ちている場所に残すと、源太の車でこの地域を管轄する港西巡査派出所へ届け出ることにした。

人間●腐った手首発見という情報で、まずパトカー二台に制私服の捜査員が分乗して現場に向かった。

問題の手首というのは、明らかに、人間の左手である。三分の二の肉は腐敗して、骨から離れており、指紋等の採取も、困難な状況になっていた。

その上、犬がかなり噛んでいるので、傷みが激しい。しかし、犬によつて食ひ千切られたのではなく、腕から分離したものを、銜えてきたらしい、と分かった。

第一指と第二指は、関節包と韌帯が溶けたようになり、前部が欠けていた。そして、手根中手関節という部分も、ぐらぐらで、手根骨と半関節のあたりは、皮が破れているという状態である。

この発見された手だけでは、どんな状態の死体なのか分らない。最悪のケースでは、殺人事件の被害者が、土中に埋められていることもありうる。しかし、自殺者が長いこと、人目につかない森の中に放置されている場合もある。

また、事故死や行路病死者のケースもなくはない。
とにかく、付近一帯を搜索して、犬がどこから首首を運
んできたか、それを突きとめようということになった。

6

事態は、源太が恐れていた方向に動きつつあった。

「あんた達、犬はどっちから歩いて来たんだね？ それを
正確に話してほしいんだがね」

と、薄いブルーの開襟シャツを着た巡査部長に訊かれた
のが初めだった。

源太達は、

「おれにもよく分からないんですよ。大体、この見当でし
た」

「なんだか、団地のある向こうの方だと思うけど……」
と、およその見当を喋った。

警察では、三十名弱の捜査員を、一列横隊に並ばせ、草
むらの中を、源太達の誓言する方向へ、搜索しながらの前
進を試みた。

前進するに従って、扇形に展開してゆく方法をとり、見
逃がしのないようにゆつくりと調べた。

源太らは、その間、職業、年齢、住所などまるで被疑者
のように綿密に訊問されていた。平和プログレスへも、身
許確認のために電話が入れられたようだし、まったく「気
色」の悪い時間だった。

しかし、源太達は、一刻も早く解放されたいので、警察
にはあくまでも協力的な態度をみせていた。

二時間半にわたる人海作戦は、結局、成功しなかった。
なにひとつ、首首につらなる部分を発見できなかったのだ。

そこで、神奈川県警では、本庁から警察犬〈霧笛号〉を
派遣して、同じ犬でも、訓練したシェパードに、人肉の在
り処を探らせようとした。

本来、首首を銜えてきた犬に、元の場所へ案内させるの
が一番だが、トレーニンングしていない野犬には、悲しいか
な、そうした才覚はないのである。

発見された首首の臭いを充分に嗅がせ、〈霧笛号〉に
「行け！」のサインを出した。〈霧笛号〉はすぐさま、源
太達の示したと同じ方向へ走り始めた。そして、草むらの
中を、時々、立ちどまっては、右へ左へと走り続けた。

〈霧笛号〉は、これまでに、犯人の遺留品から二件の事件
を解決に導くという功績を上げていた。それだけに、今回
も期待されたのだが、臭いの跡を追って、舗装道路のそこ
ろへ出てくると、どうやらそこでトレーニスできなくなった
様子だ。

いかに優秀な警察犬でも、強烈な自動車の排気ガスには、
お手あげということらしかった。

警察犬でもダメだというので、再び、人海戦術をおこな
ったが、午後にはいっても、手がかりはつかめなかった。

毎朝新聞横浜支局が、港西巡査派出所の管轄内で、人間の腐爛手首が発見されたという情報をつかんだのは、午前十時半頃だった。

同じ社会部でも、特集記事担当の梶三郎は、まだ自宅の布団の中にいたが、デスクの葉山の電話に起こされた。

「……ちよつくら頼むよ。現場はおたくの近くなんだ。今正ちゃんも細田君も留守だから……。もし殺人だったら大きな事件になるかもしれない」

自分の家の近くとなれば、これは社会部だろうと学芸部だろうと、新聞記者として放っておけるものではない。

梶は外出の準備をした。三DKの建売りの家だが、妻の係子が急死してみると、殺風景でしかも広すぎる感じがする。顔を洗い、仏壇の前で合掌すると、メシも食わずに家を飛び出した。

タクシーを拾って、三分足らず走ると、パトカーが目にはいった。

立ち番の警官に、事件の概要を聞いたが、要するに、人間の左手首が発見されたというだけで、一向に要領を得ない。手首は男性のものらしいが、年齢はもとより、どこにあつたのかも不明なのだ。

いくらなんでも、手首の落とし物はありえないから、どこかに埋めてあつたのだろう。その場所の捜索が続行されているという。

聞いてみると、発見者の滝源太と北島繁の二人は、未だ

本人の車のそばにいてというので、梶は会ってみることにした。

梶は、野犬の捕獲という商売に興味を持った。

「……毎朝の者です。この辺にはよく来ていますか？」

梶に訊かれると、源太はいかにも迷惑そうに額に八の字をつくつた。

「まあ、たまにね。しかし、こんなことは初めてだ」

「そうでしょうが、犬を扱い慣れているんだし、その……犬の来た方角には、間違いないんでしょうね？」

「そう思っていますよ」

「ぐるつと円を描くような歩き方をした可能性は？」

「そんなことは、おれには分からん」

と、源太は、伸びた鬚髭に触れながら、不愉快そうに言った。

「そうしてみると、この見当ですか？」

梶は、指で西の方角を指し、背のびしてみせた。

「そう、その方向……」

梶は、真夏の太陽の眩しい光に、少し眼を細めながら、じつと遠くを見た。そこには、白い壁面を輝かせた中高層の団地が、夏雲の下にあつた。

反対側が、緑の森とゴルフ場なのに対して、そこは人工的につくられた新市街地である。はるか遠くに、新装開店のスーパ―があげたアドバルーンも見た。住宅ビルの陰